

# 実践を以て倫理の風となれ

上 廣 榮 治

私たちの会報を『倫風』と改称してから、早くも二年の歳月が巡りきました。

改称にあたって、私がこの誌名にこめたのは、世に倫理の新風を吹きこみたいという熱い思いでありました。「倫」はいうまでもなく倫理のこと。そして「風」には、正しい教えを以て人を善に導くこと、善き教えを展開して人を感化善導すること、という意味合いがこめられています。

辞書をひもとけば、風教、風信、風説、風習など、風が人の思いや世の動き、習俗を伝えるという意味の言葉がたくさん出てきます。しかし、風が伝える世のさまは一樣ではありません。また、風のさまも多様です。穏やかに善良な気風を浸透させる微風もあれば、すべてを吹き飛ばしてしまう、天が怒っていると思えぬ暴風も、ときとしてまたあるのです。

では、『倫風』の二年間に世を吹いた風や如何と振り返ってみますと、人々を善に導く良風よりも、

はなはだしい暴風が吹き荒れた二年間であったと言わざるを得ないのであります。相次ぐ少年犯罪、金融不祥事、官僚の汚職、大型倒産などなど、それまで、わずかに予想し得るだけであった事件が、まことに不幸なことに、次々と現実化してしまふという、まさに大混乱の二年間でありました。

しかし、こうした暴風によって、善き風「倫風」が吹き払われてしまったとは、私は思いません。暴風の時期にこそ、その強い風に乗って飛翔するものがある、と私は思うのです。

地上のすべての営みを吹き払ってしまう暴風で思い起こすのは、漢王朝を樹立した劉邦に「大風歌」と呼ばれる詩があったことです。詩が作られたのは紀元前一九五五年、劉邦の死の七か月前です。群雄割拠した秦王朝末期の戦乱を制して天下統一をなし遂げ、最後の内乱を收拾した劉邦は故郷に帰ると、郷民とともにこの「大風歌」を歌い舞ったのであります。

大風起こりて、雲飛揚す 威、海内に加わりて故郷に帰る いづくにか猛士を得て四方を守らん  
劉邦の歌う「大風」とは、今日では想像もできぬような大暴風であったろうと思われれます。秦王朝がその暴政によって瓦解し、黄河流域の全土に食を求める群衆が渦を巻くようにして闘争し、連日、万余の人が戦いと飢えに死ぬこと十五年。倫理も信義も地に堕ちておりました。

しかし、かかる大風の時期にこそ、その暴風を利して高く飛揚した幸運児たちがありました。それは「大風起こりて、雲飛揚す」と自ら歌う劉邦や項羽などの英雄たちでした。なかでも劉邦はついに群雄を制覇して「威、海内（中国全土）」に行きわたり、今、「故郷に帰」ったのです。

天下の戦乱を收拾した劉邦の政治は、人が生まれながらに持っている倫理観によるといふ、実に無理のないものでした。その子、文帝の時代には儒教にならって、上が善教を垂れて下を教化する「風教」につとめ、中国に最初の繁栄期をもたらします。

しかし戦乱が収まり、世が平和を享受しているからといって油断はなりません。天の意思はいつ転変するかわからないのです。再び大風の時がやってくるかもしれないかもしれません。そこで、「猛士（賢人）を」求めて「四方を守」ることに意をそそがなくてはならない。勝ちにおごらず己の身を厳しく律してゆかねばならない、そう劉邦は歌うのです。

今、平成の大風のなかにあつて、我が会もまた、漢の劉邦の如く大きく飛揚することを期待されています。千々に乱れた世を倫理を以て整えよと要望されているのです。このことは近年ほど、「倫理」という単語が新聞やテレビで、回数多く使われたことはなく、また、これほど倫理の欠如について語られた例もなかった一事からも知れるのです。今日の社会的問題のすべてが、倫理観の欠如に根ざしているのだということに、やっと人々は気づき慌て始めているのです。

本年年頭と春の大会で、私は倫理こそが人間を幸福にし得る唯一の道である、という確信についてお話をいたしました。政治も経済も科学も人間を幸福にすることはできない。すべての人間活動の根幹に倫理を据えてのみ、人みな の 仕合わせを実現できる。二十世紀の歴史とは、そうした倫理の大切さ、倫理の力を知るためのプロセスであった、そういう意味のことを申し上げたつもりであります。

しかしながら、現状の如き暴風のなかで求められている倫理とは、新聞やテレビのいう「襟を正す」とか「自己責任を思う」などという内省的なものではない、と私は直感します。

世は倫理における乱世である。地上の倫理の頹廢に天が怒り、相次ぐ不祥事、不測の大事件などの暴風をもたらしているのが、今なのであります。

かかる乱世に求められているのは、反省でも正論でもありません。口舌の徒は何の役にも立ちません。大風の吹きすさぶなかを、自ら剣を引つ提げて旗を掲げ、救世の義兵を起こした劉邦らのように、吹き

すさぶ大風に乗って飛揚する乱世の英雄たち、すなわち倫理を真摯に実践して止まぬ者たちこそが求められているのであります。

我が会はその創設以来、つねに大風の中にありました。終戦直後の混乱期、旧来の倫理道德のすべてが否定されるという逆風の中にあつて、我が会友のみが実践を以てその大風に乗り、大きく飛翔したのです。身を以て倫理を実践することで、倫理の大道を踏むべきことを世に示し、今日の隆盛をもたらしたのです。同じ時代に、口に正義を唱えながら、倫理を忘れて功利に走った口舌の徒は、いま大きなツケを求められています。

かかる戦後五十余年の経験から、私たちは乱世にこそ「現実には効力を發揮する倫理」「力ある倫理」とは何かを、確実に把握することができました。すなわち、「実践する倫理」これあるのみです。実践なくして倫理を論じても画に描いた餅にしかすぎないこと、どんなに小さくとも実践が伴うときには大きな稔りを生じることが、私たちは日々、我が身を以て体験し続けてきたのであります。

この二年の間、私は「倫風」のこの欄に、そのときどきに思うこと、かくあれかしと念ずることを書き記してまいりました。また、当誌のどこを開いても、会員諸賢による尊い知恵や体験が語られております。皆様は、それぞれに「なるほど」と同感し、納得することがおありだと存じます。

しかし、それだけにとどめてはなりません。それだけでは、毫末の意味もありません。同感し、納得したことを、我が身を以て実践すること、それこそが大切なのです。乱世を嘆く百万言よりも、いままぐに実践を為す一人の行ないが尊いのです。そして実践を積み重ね、倫理を求める大風に乗って飛翔する者こそが、世を善なる方へと導く救世の英雄となるのであります。

「倫風」がその一助たらんことを、第三年度の初めにあたつて、心を熱くして願つております。